

柳家 さん喬 狂言 舞演会

『滑稽噺』と『人情噺』、江戸落語の伝統を描き分け
外連味なく正攻法で落語の面白さを魅せてくれる
コロナ禍で四年余り、待ち焦がれた
「県民ホール寄席」掉尾を飾る待望の、さん喬独演会

しらくハマ寄席 (第421回・県民ホール寄席)

2023年
12月20日 [水] 18時30分開演
(18時開場)

[会場] 県民ホール (小) ホール

[入場料] 税込指定3000円 (一般¥3500)

[チケット取り扱い所]

- ・チケットかながわ ☎ 0570-015-415
- ・ローソンチケット ☎ <https://l-tike.com>
- ・チケットぴあ ☎ <https://t.pia.jp>

チケットの予約・問い合わせは

しらく茶屋

(平日の10:00~17:00)

☎ 045(242)5697 へ

細部に宿る落語の美学

舞台袖から現れると、うつむきがちにスタスタと高座まで歩き、お辞儀をするまで、まったく客席を見ない。顔を上げればにこやかな笑みを満面にたたえ、あの艶のあるふつくらした声で時候のあいさつをされれば、ほっとした空気が客席に漂い、たちまち魅了される。

柳家さん喬

やなぎやさんきょう

まろやかな雰囲気と柔らかな物腰で緻密につくり上げていく噺ばなの構成、人物描写の卓拔さと繊細さを兼ね備え、詩情あふれるみずみずしい一席はドラマティックで綺麗な高座で、『そば清』『水屋みずやの富とみ』『掛け取り』『鼠穴ねずみあな』などにそれが顕著だ。

長年、日本舞踊を嗜たしなみ、名取なとりの腕前だ。その

せいか、高座にも所作のエレガントな風情が表れる。美は細部に宿るというが、さん喬は些細ささいな箇所を決しておろそかにせず、丹念に描く。聴衆も五感を総動員して見てしまう。緩急や声の強弱を駆使したリズムが耳に心地よい。高度な技術を高度と感じさせないさりげなさがある。さん喬の真骨頂は、ここにあると思う。

師匠である五代目柳家小さんを敬愛し、芸は型ではなくハラだという教えを胸に、多くの弟子を育てている。評価の高い人情噺にんじやうばなだけでなく、滑稽噺こっけいばなも本人は大好きなのだそうだ。落語のライブの楽しさと落語美学の素晴らしさ、楽しい空気を観客と共有したいという思いをもち、日々高座に臨んでいる。大看板となった今でも、人気と実力を兼ね備えたベテラン真打として、寄席でもホール落語会でも活躍している。

受賞歴も多く、CDやDVDも多数発売されているが、まずは生なまで、さん喬の高座に触れてほしい。

(佐藤友美)